

クリスタルセイバー

ミア

産卵淫辱に堕ちる戦姫

小説 火村龍 挿絵 ぐろいわしんじ

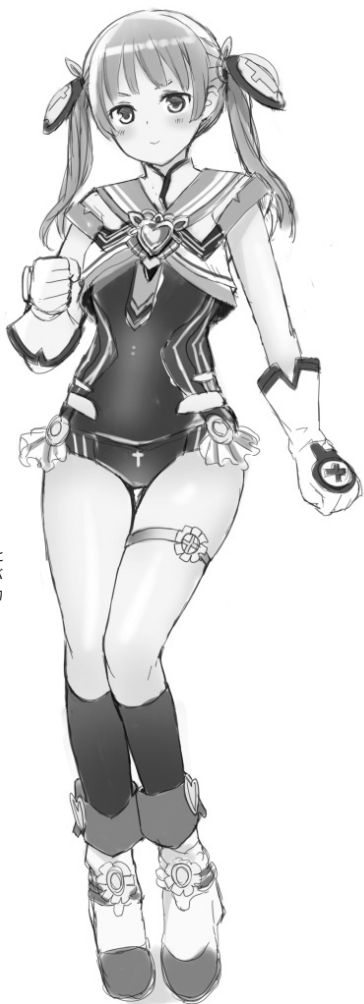
立ち読み版



序章	終わりの街	006
一章	未熟な戦士	012
二章	現れる鬼、鮮血に濡れるスク水スーツ	043
三章	苗床化する媚体、産みつけられる卵	084
四章	蠢く妖卵、再臨の鬼	118
五章	吸われるクリスタルエナジー、屈辱の弱化スーツ	157
六章	堕ちていくボテ腹戦姫	201
終章	終わりの街	247

登場人物紹介

Characters



みづ あ
水 愛

「クリスタルセイバーミア」に変身して、妖魔と戦う少女。敗北してしまったクリスタルセイバーからクリスタルを受け継いだのだが、まだ力を完全に使いこなせていない。

墮鬼の股間には、禍々しい怒張がそそり立っていた。妖魔のものよりも硬く雄々しく、そして太い。亀頭全体は赤茶け、カリ首はエラが張り、尿道口から漏れるカウパーは濃厚なローションのようだった。竿は全体にミミズが巻きついたかのように血管が浮き出ており、黒々としている。ピンと勃起したペニスに勢い余って鍛え上げられた腹筋にぶつかり、跳ね返るほどだった。妖魔のやり方をよく知る、餌食えじきにもなりかけた美少女ヒロインは、動けない自分がどんな目に遭うのかをよりリアルに想像してしまい、恐怖の悲鳴を上げる（あ、あんなのに犯されるの!? ああっ、大きすぎる……。ムリよ、あんなの挿れられたら、わたしのアソコ壊れちゃう……。壊されて、苗床にされて……。そんなのダメ……。）

いままでこんなことはなかった。無力な頃に襲われたのとは違う。いまはスク水スーツを着て、妖魔と闘う変身ヒロインとなっているのだ。いままで負けたことなんてなかった。なのに、いまは無様に倒れて、怒張を見せつけられて、犯されそうになっている。ミアは敗北の屈辱と陵辱の恐怖に震えた。

苗床にされて、卵を産みつけられてしまったらどうなる？ ミアは「あああ……」と嘆息した。あの眩いドレスコスチュームに身を包んだ少女も、卵をどうにかするために他のクリスタルセイバーに助けを求めていた。未熟な自分が、産みつけられた卵を浄化できるとは思えない。絶対に、卵を産みつけられることだけは防がなければ——だが、ミアはいきり勃つ肉棒を防ぐ方法を何一つ思い浮かべることができなかった。墮鬼の甘い吐息に鼻をくすぐられる。鋭い眼光に身体を舐め回される。ミアの肩が激しく上下した。

「牡はミアの足下にしゃがむ。痺れて力が入らないヒロインの脚を広げ、そそり勃つペニス、スク水に守られた股間に押しつけた。」

「ふあああつ！　そ、そんなものこすりつけるなんて、許さないんだからあつ!!」

悲鳴を上げる聖少女をよそに、裸になった妖魔の腰が動き始める。硬い陰茎が、乙女の大事な場所をコスチューム越しに粘つくくなくぞつた。薄い密着コスチュームから、肉棒の感覚がはつきりと伝わってくる。ドクドクと脈打つ牡肉はスク水スーツの感触を堪能しているようだった。腰が突き出され、陰囊が接触する。

「貧相な肉体をしているかと思えば……悪くない。股間にはしつかりと肉がついている」

墮鬼はなおも摩擦を続けた。シュツシュツと、硬いモノが薄いスーツ越しに敏感な乙女の部分を刺激してくる。穢れ、煮えたぎる牡の欲望の感触に、ミアは総身を震わせた。身体にはまだ電撃の痺れが残っている。グラブとブーツに渾身のエナジーを込めて吹き飛ばしてやりたい。なのに、弱々しいエナジーでスーツの強度を保ち、股布をずらされないようにするのが精一杯だ。「少しは抵抗したらどうだ？」と墮鬼に嘲笑われる。

「う、うる、さい……っ。あ……ん、やめ……き、汚いっ……あつ……あつ……」また陰囊がスーツに触れた。たぶたぶとした感覚が尻肉に伝わってくる。

(ぶ、ぶよぶよしてる……あああ、やだ、熱いよお……)

墮鬼はヒロインの両脚を肩にかけ、足首を掴んでいた手を太ももに這わせた。ヒップが持ち上がり、股間が上向きになってしまう。ブーツの履き口から、ドボドボと水が漏れて

きた。ブーツの中で、濡れたハイソックスが蒸れ始める。生温かい感触が気持ち悪い。

淫猥な空気が漂う。空は妖魔の気に当てられ、施設の周囲にのみ暗雲が展開したようだった。敗北ヒロインの陵辱劇が始まるのだ。堕鬼はいよいよ呼吸を熱くし、漏れ出たカウパーで股間の布をしつとりと濡らし、勃起した肉塊で秘部を叩き始めた。

「ああんっ！ くうっ、や、やらっ……!! うううっ、ぺ、ぺちぺちすんなあっ!!」

(いやああ……て、手に力入らない……抵抗できないなんて……!)

よろよると力なく持ち上がった手が股間に向かうが、乙女の果実を刺激してくる欲望を払いのけることはできない。堕鬼はミアの手首を掴み、振り払ってみろと言わんばかりに握りしめる。ぐじゅううっとな音が鳴り、ブーツと同じくグラブからもプールの水が流れ出した。「ふぎゅうっ！ は、はなせええ……」ミアは痛みにも首を振り、瞳を潤ませる。

「ククク……卵を産みつけ、力を根こそぎいたたく……!!」

「はうううんっ?! よ、妖魔は……みんなそうよね……! ひ、卑怯者っ! こんな、こんなことして……ああっ! 女の子を、辱めてえ……」

「どうした、感じているのか。濡れ始めたか？」

「ば、ばっかじゃないの……! はふ、う……あ、あんたのお粗末なものなんかで、わ、わたしが……え……ああっ!!」

ミアの声はみつともなく上擦っていた。視線が胸にいき、絶句する。

(な……ど、どうして……!!)

スク水スーツに、二つの突起がはつきりと浮かび上がっていた。それに気づいた途端、たちどころに乳首がむずがゆくなり、性の疼きを主張してきた。

股間も同様であった。敵の肉棒など嫌悪感しか覚えなはずなのに、なぜか徐々に気持ちよくなってくる。ミアの中の女が目覚まし、もつと弄って欲しい、快感を与えて欲しいと叫び始めているのだ。

「ああっ、うそ……ああっ、ああううっ」

「クク……。俺の視線、息には牝を発情させる力がある。たっぷりと吸っていたな？」

「そ、そんなことで……アアッ、な、なんで……へ、変身しているのに、そんなの効くわけ……！ こ、このスク水スーツを着ていればあ……」

「バカめ。俺は貴様が受け継いだそのクリスタルの力を吸って生まれたのだ。他のクリスタルセイバーならばまだ防げようが、ただでさえ未熟な貴様のこと、俺の力を防ぐことなど不可能だ。そして、クリスタルの力を完全に吸収したとき、俺はすべてのクリスタルセイバーを圧倒する存在となる……」

「そんな……スク水スーツ……ああっ！ ま、守ってくれないなんて……。やめて……い、息……ああああ……ス、スーツ見るなああ……イヤあ、スーツ感じちゃ……ああっ」

甘い息がたまらない。冷たい視線がたまらない。一度自覚した発情の予感、爆発的に膨れ上がり、ヒロインの身体を侵蝕していく。

ミアは、スク水スーツの下で、ひしつと締まっていた牝の華が、淫らにも咲き始めてい

るのを感じていた。こんなときだというのに、慣れ親しんだ感覚に唾が出てしまう。スーツの上からソコを刺激されると、「きゆうんっ」と牝犬のような喘ぎ声が漏れて、キユツと反射的に膣に力がこもってしまふ。

それは乙女の秘め事と同じであった。ミアは自室で自慰行為を愉しむとき、いつもすべすべのショーツの上からラビアの広がりを見出し、軽い、快樂で満足していたのだ。

「だめ……そ、それ以上したら、ぼこぼこにしてやるんだから……あつ……あああつ!!」

「気の強い女は嫌いじゃない。その顔が快樂に蕩けていく様は見物だからな」

しかし、いままでこんな快感を経験したことなどない。発情していくのを自覚させられる。いままでの自慰行為がおままごとであったとわからされてしまふ。太ももに触れられているだけなのに、声を抑えるという簡単なことができない。

墮鬼の右手が柔肌を滑り、太ももから股間へ向かった。コスチューム越しに指がラビアをなぞる。鋭い爪に膨らんだ陰唇を搔かれ、強烈な快美感が手袋、ブーツの先にまで走り抜けたかと思うと、雷撃の痺れを上回る快樂電流が胸を詰まらせた。ミアはたまらず「はううっ、あうあうううっ」と喘いでビクビクンツと戦慄く。

(感じちゃダメ……!! あつ、そ、そこはあつ!! わ、わたしがいつも弄つてるところ……うう、アソコのピラピラ……ひいつ、ク、クリトリスう……)

「ここを感じるようだな……」墮鬼の唇が意地悪くつり上がった。

「ちがう、ちがうう……感じてなんかない……」

ばれちゃダメ、正義のヒロインが、いつもそこを弄っているなんて……！ そんな乙女心、変身ヒロインとしてのプライドで口にする台詞は、牡の嗜虐心をいたずらに刺激し、自身をさらなる快楽の坩堝るつぼに叩き落とす結果しか生み出さない。

「そんなところ弄られたって……あぁっ！ な、なんともないんだから……」

初心な少女のごまかしなど、生まれた瞬間から女の扱いに慣れている妖魔を相手に通じるものではなかった。皮肉なことに、女を発情させ卵を産みつける怪物は、人間のどんな男よりも、女を牝へ墮とし、媚体のわずかな変化から、内面を読み取ることに長けていた。「クク……。ラビアとクリトリスを弄られるのが快感か？ 声が変わっているぞ。隠しても無駄だ。この感触……頻繁に自慰をしているな？」

「な……っ!! そ、そんなことしてないもんっ!! あぁっ、ひゃひっ!!」

凶星だった。ミアは顔を真っ赤にし、大声を上げて否定する。だが、濡れた瞳と、口を開けた途端に漏れてしまった喘ぎ声は、堕鬼の言葉を肯定しているのと同じであった。

「ちがうもんっ、ちがうもんっ!! わ、わたしは……あきやあぁんっ」

否定すればするほど追い詰められていく。口にする言葉と、溢れ出る愛液の事実には、被虐的な快楽がこみ上げる。

(ば、ばれちゃってる……。オナニーしてるの……。か、感じるところまでえ……)

堕鬼の指は執拗に陰唇と陰核を責めた。爪の先で突き、チクツとした痛みで敏感にしたかと思えば、指の腹でくすぐるように撫でる。もどかしく、得も言われぬ魔悦がミアの下

半身を覆った。墮鬼に快感を覚えさせられてしまうことに、純情な心が屈辱でぐちゃぐちゃにかき回される。悔しいのに、愛液が溢れて止まらない。

「は、ぐ、ううう……さわんな……いじるなあ……」

ツリ目の端に涙が滲んだ。妖魔を倒す変身ヒロインのくせに無力で、コスチュームも美しいドレスではなく未熟なスク水スーツ。日常的に自慰に耽っていることまでばれてしまい、恥ずかしいくせに、秘部を弄られて感じる始末——。情けなさに胸が詰まり、小さな嗚咽なげなげとなった。それが、この圧倒的な力を持った妖魔、墮鬼を調子づかせるだけだとわかっていても、悔し涙が零れてしまう。

「ククク。いい表情になってきたな。屈辱を覚えながら感じるとは……クリスタルセイバーは変態なのか？」

墮鬼の言葉が胸を刺す。事実、悔しがり歯を食いしばる表情とは裏腹に、秘部はどぶどぶと愛液を漏らしていた。自慰経験を指摘され、こなれた秘部をスーツ越しにかき回されてからの、溢れ出る愛液の量と濃度は段違いであった。

「ゆ、許さない……変態なんかじゃ……！ ああつ、コスチュームずらしちゃだめえつ」
(み、密着スク水スーツが……う、うそっ……お肌から引き剥がされちゃってるうっ)

しつとりと濡れたスク水スーツの股間部分、濃紺の布地と肌の間鋭い爪の先が潜り込み、密着コスチュームを横にずらしていく。昂奮し膨張した無毛の恥丘やラビアが徐々に露わになり、ついにはすべてがさらけ出されてしまう。

「あああ……ス、スーツが、こんな簡単に……！」

普通ならば、身体を守るスーツがずらされてしまうことなどあり得ない。だが、このクリスタルの力を吸って生まれた墮鬼の前に、未熟なスーツはまったく抵抗できなかった。

露わになった女の子の秘所は、熟れすぎ腐りかけた果実の如き蕩け具合であった。ピラピラの唇が大きく開き、膣内までよく見通せる。膣口、膣壁は見事なピンク色で、悦楽を貪る膣壁が蠕動ぜんどうしていた。奥からジュークジュークと甘いニオイのする牝汁が溢れてくる。

卑猥で淫乱な牝穴だった。墮鬼の身体から溢れるサディストの気が激した。童顔でパイパンの変身少女が顔を真っ赤にして抵抗を試みているのだ。昂奮しない理由がなかった。

「あつ、あああつ……み、見ないでええ……」

「もうすっかり出来上がっているな。直に触つてやろう」

牝を征服する獐猛な獣は、迸る狂気を指先に込めて、ミアの秘裂に触れる。どれほど昂奮しても、この妖魔は決して自分を見失わない。変身ヒロインにつけいる隙は一切なく、状況は絶望的であった。

墮鬼の指先がラビアをなぞり、蕩けた少女の膣内に侵入してきた。未開発な膣壁はすでに愛液で湿り、粘性の高いエキスでひしつと閉じられていた。墮鬼の指はズブズブと音を立て、艶めかしい牝肉をほぐし、かき分けた。鋭い爪が鋭敏な膣粘膜を擦る。過敏になったそこを、硬い指の腹が乱暴に捏ねる。ミアの全身が快楽電流を受けて跳ね上がり、乙女の大事なところを辱めようとする牝の腕を払おうとしていた白グラブが、慌てて口元を

押さえる。「ひぐつ、あつ、あひいつ」くぐもった嬌声が、手袋の隙間から漏れ聞こえた。

「さすがは清純な正義の味方だ。自慰はずいぶんしているようだが……まだ処女だな」

「あうう、い、いわないで……」

墮鬼の皮肉たっぷりな言葉に、ミアは小刻みに首を振り、牡の邪眼から目を逸らした。視線を泳がせ、羞恥心に悶える変身ヒロインに、墮鬼は追い打ちをかけるように囁く。

「わかるか？ ラビアと膣内で感覚が違う……。ラビアとこの豆は……」

墮鬼の爪がラビアを摘まみ、クリトリスを弾いた。「んひいいいつつ!!」ミアは喉から絞り出すような嬌声を漏らす。瞳をギョツと閉じ、大きく仰け反り痙攣した。腐りかけの甘すぎる果汁がぶしゃあああつと迸り、牡の膨張した肉棒を濡らす。

「このように激しく感じるが、膣内はそこまでではない」

ずぼおつと淫猥な音とともに膣口が牡の指を呑み込み、入り口付近の膣内をかき回した。「処女膜の近くを弄るのが怖かったのだろう？ 服の上から弄り続けていたな？」

ラビアとクリトリスをしつこいくらいに責め立ててくる墮鬼に、ミアはもうなにも言い返せなかった。言い訳も否定も快楽に押しつぶされ、口を開けば愛らしくも淫猥な喘ぎ声しか出てこない。できることは、襲い来る淫悦の波を堪え忍ぶことのみであった。

（わ、わたしの身体……ああつ、ぜ、ぜんぶばれちゃう……恥ずかしいよお……。スク水スーツの下……いやらしいところ、見透かされて、裸にされちゃう……）

「あひいつ。ああんつ、そ、そこつ、だめだめえつ……」

くちゆり、じゅぽぽ、ぐちゅちゅちゅ……。ぬめりを帯びた指が膣口を惑わす。悩乱する少女がやっと口を利けるようになったときにはもう、熟れた牝果実から漏れる愛液で、恥丘の周りから太ももに至るまでヌラヌラと光っていた。

「美しい処女膜だ……。ニオイも極上。ククツ、これは嬲り甲斐がある」

ひんやりとした指先が、ミアの処女膜に触れる。膣口から奥にかけて甘い痺れが走った。それはいままで体験したことのない快感で、変身ヒロインは抵抗することも忘れて仰け反ってしまう。極めつけに、ビクンビクンと腰が痙攣するのであった。

墮鬼は情け容赦なく聖少女を責め立てた。人差し指が鍵を回すように回転しながら押し込まれる。乙女の貞操を守る膜は限界まで伸びきって、いまにも破けてしまいそうだ。

「ああっ……。そ、それに触んなあつ。いやああつ、ダメだったらあつ」

叫んだミアの声は、どうしようもなく震え、怯えを隠せていなかった。なのになぜだろう。全身からぶわつと汗が噴き出してしまふ。快感に、膣がキュンと切なくなるのだ。

悦楽に痺れる身体が思うように動かない。貞操がいまにも破られそうだというのに、太ももは嬉しそうにプルプルと震えている。

ビクビクと、墮鬼のペニス跳ねる。牝の肉棒は、これ以上の我慢はできないとばかりにミアの秘部に迫った。指が引き抜かれ、噴き出した牝汁で濡れた龟头が膣口に触れた。いよいよ、守り通してきた処女が奪われてしまふ――。

「いやあああつ。あふつ、ふあああああつ。だめだめだめえつ！」

「いい声で啼なく。いくら拒絶しても、ここはそうは言っていないようだぞ」

墮鬼の邪眼がミアを捕らえた。ピクツと全身が硬直したかと思うと、ガクガクと戦慄わななく。ペニスの秘裂へのキスで、牡の先走り汁がミアの秘部を冒し、快感熱を発したのだ。

（な、なんて気持ちいいの……。こんなのダメなのに……クリスタルセイバーなのに、わたし、ぜんぜん抵抗できない……！　しよ、処女奪われちゃうううつ）

「や、やめ……それだけは許してええつ」

亀頭はすでに腔に埋まり始め、処女膜に触れていた。大事な処女が……いつか大切な人ができたときに捧げようと、純情な想いを抱いて守り続けていたものが、こんな穢らわしい化け物に奪われてしまう——。ミアの口から、思わず懇願の言葉が飛び出した。

「フハハハ!!　いいぞ、もつと泣き叫べ。それが糧かてとなるのだ」

ミアの声は嗜虐の炎に脂を注ぎ込んだだけだった。猛々しく吠えた墮鬼の腰が一気に沈み込んだ。

ズブウウツ!!　ぐじゅつ、じゅぶぶつ、ぐじやあああつつ!!

「あひつ……いやあああああツツ」

ミアの甲高い悲鳴は、苦痛と悲しみに満ちていた。太く長い牡槍が、小さく狭い女の子の花園を深々と刺し貫いていた。破瓜の痛みが脳天まで突き抜け、瞳からぼろぼろと大粒の涙が零れる。ツツ……と破瓜の鮮血が流れた。

「い、いたいっ！　ムリだよおつ。そんなおつきいの……ひぐうつ！　ぬ、ぬきなさ



いよっ！ あああつ！ いたい、いたいいいいいつっ！！」

腔口こそ日常的な愛撫でこなれていたものの、腔奥はまったくの未開発だ。小柄なミアは、狭い腔に人間よりも遥かに大きな肉棒が無理矢理侵入してくる痛みに、表情を歪ませ泣き叫んだ。

だが、変身ヒロインの泣き声を聞いて陵辱の手を緩めるほど、妖魔は甘くない。痛がるミアを無視して、堕鬼は腰を動かし始めた。

腰を引き、打ちつける。その動作に、ミアは腔内の繊細な腔肉がすべてほじくり返され、外に引きずり出されてしまうのではないかと思うほどの痛みを感じた。愛液はたっぷり分泌しているとはいえ、妖魔のペニスはあまりに禍々しく、そして乱暴すぎた。

「痛いよおっ！ 大事なところ壊れちゃうっ！ お願ひ、ぬいてえっ！ ああつ！ だめええっ、太いのおっ、はひ、はひいっ、腔内のお肉引っ張られへるよおっ」

「フハハハ!! いい悲鳴だ！ 人間の女の……特に狩人などと驕り高ぶっているクリスタルセイバーの苦鳴の声は最高に昂奮するぞ！ もっと泣き叫べ戦士よ！ そして、悦楽に染まっていく身体を恥じ、悶絶するがいい!!」

「く、狂ってる……！ あんたたちおかし……っひいいいっ！ 奥っ、つかないでえええっ!! わたしの、だいじなところおっっ」

妖魔のペニスは、情け容赦なくミアの子宮口をも犯した。鋭い槍の穂先のような亀頭が、赤ちゃんを産む大事な場所の入り口を、串刺しにせんとばかりに突いてくる。ノックされ

るたびに子宮が揺れ、たまらない衝撃が肉体の内部からミアを刺激した。

変身ヒロインは泣き叫び、なんとか牡棒を膣から締め出そうとする。しかし、雷撃の痺れが抜けた身体を起こそうとしても、ペニスが少しでも動くとも全身が戦慄き、起こしかけていた上半身がふにやりと崩れ落ちてしまうのだった。

抵抗しようとしては失敗する。ミアは何度もそれを繰り返した。その間にも、妖魔は初心な少女が知らない腰の動き、技を使い、未開発の膣内性感スポットを責め立てる。その内に、ミアは恐ろしいことに気づいた。

「ふにゃあつ！ あひつ、えつ、あああつ!! う、うううううつ!!」

（ど、どうしてっ!? い、痛くなくなつて……ああつ！ う、うそよ……そんな……！
なんで、なんで気持ちよくうっ!?）

犯されてからまだ時間は経っていない。しかし、ミアの吐息は甘く切ない女のものへと変わり始め、ミア自身もそれを自覚していた。痛みは感じているものの、快楽の方が上回っている。妖魔のカウパーは、未開発の性感帯を、凄まじい速度で開花させているのだった。クリスタルセイバーから生まれた上級妖魔の、性技、カウパーの質、量が合わり、妖魔の力に耐性を持つクリスタルセイバーミアを、いとも簡単に快楽を感じる身体に墮とさせていく。完全にクリスタルの力を引き出すことができなければ、まだ抵抗できたかもしれない。だが未熟なミアはスーツの弱さも相まって、墮鬼の手の中で弄ばれてしまう。

「はあつ、はあ……！ ぬ、抜きなさいよ！ 抜いて……!!」

下等な妖魔どもは、少女の全身にたっぷり粘液をかけ、ぎゅつと締めつけた。まるで、粘液をコスチュームや肌に浸透させようとしているかのようだった。淫魔どもの狙い通り、コスチュームの中に粘液は容赦なく入り込んできた。手袋やブーツに包まれた手脚は、粘液から逃げられず気色悪い感触に浸けられた。肌はぬらぬら、てらてらと光っている。媚肉たっぷりになってしまったムチムチボディは、スレンダーだった頃とは別の魅力があった。牡を誘う淫らな牝の色香だ。サディズムをいたずらに刺激するものだった。

「お汁ぬりぬりしないで……。ああつ、あ、熱い……。スーツが、む、蒸れちゃうう」

「ああ、その通りだ。この卑猥な服の下から、蒸れた女のニオイが漂ってくるぞ。臭く蒸れた汗、そして牝汁のニオイだ」

「あああつ。い、言わないで……。そんなわけないんだから……。正義のヒロインが、汚くなっちゃうわけないんだからあ……」

（き、気持ちいいっ！ わたし、汗臭くてオマンコ臭い変身ヒロイン……。あううつ、そんなこと思っちゃダメなのに、妖魔なんか責められて感じちゃう！ ……アアッ！）

ぷしやぷしやあつっ!! ミアの秘部が戦慄いた。高まった感情が行き場をなくし、変身ヒロインは軽く絶頂してしまった。絶頂エキスが膈内に満ち、子宮に染みだした。

絶体絶命のピンチに、追い打ちをかけるような変化が現れる。

「ひぐつ、な、なによこれ!? ぐつ、く、苦しい……ッ！」

ミアはお腹を見つめた。身体にフィットしていたコスチュームがどんどんきつくなる。

エナジーを吸った卵が成長していた。硬い感触が子宮内部で膨らむ。ミアは口を開け、圧迫感に呻いた。お腹が膨らんでいる！

(そ、そんなっ！ 少しイッただけで、こんなに卵が成長するなんて!!)

これ以上イッたりしたらダメ——ミアは確信した。この空間における卵の成長は段違いだ。圧迫感はいよいよ深刻になる。同時に快楽も押し寄せ、ヒロインは悶え苦しんだ。

「いいぞ。あと少しで生まれそうだ」「見ろよこの顔」「へへっ。正義のヒロインを気取っても、所詮は牝だったってことだ」

妖魔たちが口々にミアを嘲り、大きくなった腹を指した。妖魔たちの言う通り、ミアは自分のはしたない牝の表情を浮かべてしまっていることを自覚していた。快楽と卵の苦しみが同時にやってきて、ミアは「はふううっ」と呻いた。

(し、子宮苦しい……!! イヤあ……脚が勝手に開いちやうう……らめ、ガ、ガニ股なんてらめなのお……。おまんこも開いちやうからあつ)

それは、女の本能なのか、苦しみから逃れたいだけだったのかわからない。ごちゃ混ぜになった感情の中、ミアは太ももをプルプル震わせ、ググッと脚を開いた。スカートがめくれ、濡れそぼったレオタードが露わになる。(び、びらびら、開くうっ) コスチュームの下で、秘裂がべちやりと開花する。レオタードがきつく股間に食い込んでいたことと相まって、ビラビラと膨れた陰唇がべろんと零れ、レオタードを挟み込んだ。

「あふっ、あふうっつ！ はっ、はあっつ！」

無様な呼吸を繰り返す。秘部が開いたおかげか、苦しみが和らいだ。だが、ミアはいま、自分がどれだけ淫猥な格好をし、蕩けた牝の表情をしているか自覚していなかったのだ。昂奮した牝の前で、尻餅をついたままガニ股開脚を披露し、ムンムンに蒸れた牝の芳香を放つ牝豚がどんな目に遭うのか——変身ヒロインはその身をもつて教えられた。

「う、ううう。妖魔の卵が……あぁ……ッひぎゅっ!? ふにゆううううっつっ!」

ズボオオオッ!! 一瞬の早業で、二体の触手が襲いかかった。片方がレオタードを引つ張り、もう片方が一気に膣を貫いた。膣は十分に濡れ準備万端だったが、この衝撃は予想していなかった。全身に一気に流れた快楽電流に、ミアは情けなさすぎる悲鳴を上げて癡撃した。が、かろうじて絶頂という屈辱だけは堪えてみせる。

「ハハハッ! 自分から股を開くとはな!!」

「きゃあぁんっ! 抜いてっ、おふっ、ひいんっ!! ふ、深いっ!」

触手たちは、ミアの身体を軽々と持ち上げた。宙に浮いたヒロインは「放せえっ」と叫んでジタバタともがいたが、弱点の蜜壺を突かれているいま、もう触手を振りほどくことはできなかつた。

ぐじゅっ、ぬぶっ、じゅるるっ! 秘部からトロトロと溢れてくる甘い蜜が赤紫のペニス伝つていた。ぼた、ぼたと、床に垂れてもいる。スカートは胴体に巻きついた触手の下でくしゅくしゅになっている。妖魔の間から覗く太ももが切なそうに震えていた。

「こ、こんなこと許さないんだから! このお、ク、クリスタルエナ……んぶうっ!」

ミアの口に触手が入り込んだ。凜としたヒロインの表情を浮かべ、エナジーを放って触手を吹き飛ばそうとしたミアだが、途端に眉をハの字に寄せ、喉奥を突く触手に翻弄された。口の中に、苦いような甘いような、なんともいえない粘ついた液体が広がり、いっぱいになった。唇の端から、汁がダラダラと流れ出す。

膣口近くまで引き抜かれた触手が、再び子宮口に触れた。「ん〜っ！　ん〜——ッ!!」と、くぐもった声が零れた。視界が震え、白目を剥きかける。またしても、恥辱のアクメ顔を披露してしまいそうになっているのだ。

（うぐううっ。し、子宮のお口、ノックされへるっ！　ひ、開きたくなっひやううっ!!　くふああっ、ボ、ボテ腹、ボテ腹になっひやうううっ!）

ミアの下腹部は、妊娠数ヶ月目の妊婦のように膨らんでいた。触手亀頭は、ひしつと閉じられた子宮口の入り口を乱暴に突いたかと思えば、キスをするように吸いついてくる。膣の中で尿道口が吸盤のように変化し、吸着したときなど、ミアはビクンビクンッと跳ね「ひぐうううううっ!」と口唇の触手を唇で締めつけた。そしてヒップを左右に振り、襲い来る絶頂感を逃がさねばならなかった。

清純そのものといったドレスコスチュームを纏ったヒロインが見せる無様なダンスに、女を犯すことしか考えていない妖魔たちは燃え上がった。秘部を犯すものに負けじと、ミアの柔らかな口を犯す触手はズボズボと乱暴に挿挿を繰り返す。

雑魚妖魔たちは股間を硬く屹立させて、触手に犯される淫らな美少女戦士を嘲笑してい

た。その視線が秘部や顔に注がれているのを痛いほど感じ、股間が熱くなってしまふ。じゆぶつ、ぐじゆぶぶつ！音がどんどん粘つくようになっていく。一突きされるたび、その快感の大きさを示すかのように、ブーツがビクンビクンと跳ねた。

「ひやめつ、んぶううつ！らんおうにひないれつ!!げほつ、あううおえええ……」

言葉を発しようとしたミアの喉に、粘液がへばりつく。激しく咳き込み、嗚咽するが、嗜虐心の塊である触手は少女のことなど考えず、際限なく口内に汁を吐いた。

（ら、らめつ！息ができないよおつ。ネバネバして……も、もう、飲むしか……!!）

「えぐつ、ごくつ、んんつ、おえええ……ごく、ごくうつつ」

（な、なにこれつ……あ、あああああつ!?!）

注がれたエキスを、ミアは喉を鳴らして飲み込んだ。だが、飲み込んですぐ後悔した。胃に到達した粘液が、身体の内からヒロインを発情させたのだ。

胃の熱は、膣と乳首の熱と合わさって、ミアの思考をかき乱した。身体から魂が抜け出ていくような恍惚感が襲った。

ダメ——ミアは色欲に流されそうになる意識を必死に繋ぎ止める。負けない、絶対に勝つて、ここから抜け出すんだから——!

「びちゃ……んんつ、はむ、れろれろ……うう、いやああ……びちゅ、ちゅむ……」

だが、ミアはいつの間にか、触手ペニスを舐め、尿道口から精液を搾り出そうとしていた。口を大きく開いてやつと入るような極太触手に舌を這わせる。普段なら嘔吐えずきたくな

るようなニオイのするカウパーが、甘い水飴のようだった。触手がブルブルと震え、ミアの口から抜ける。惚けたように開いたヒロインの口から、ドロドロと涎と粘液が混じった汁が零れた。唇はヌラヌラと光っており、小悪魔な可愛さよりも淫猥さが勝っていた。せつなく触手が抜けたのに、ミアは目の前で揺れる触手にむしゃぶりついてしまう。

しかし、ミアの意思は身体とは別にあつた。頬を伝う涙がその証拠だった。

(イヤあ……こんなことイヤなのに、ダメなのに……！ わたしはみんなを守るクリスタルセイバーなのに……。はふうつ、こ、こんなの美味しなんて思っちゃらめえ)

見れば、ミアの両手は触手を扱とっていた。どこで覚えたのかと泣き叫びたくなるような巧みな動きで亀頭を責めている。まさかと思つて脚を見たとき、やはり純白ブーツは肉棒を弄り、射精に導こうとしていた。小さな嗚咽が、ぬぶつ、じゅぶぶつという、触手とヒロインが交わる音の中に消えていった。

戦闘経験などないのに、変身した瞬間に、並み居る化け物どもを迷いのない俊敏な動きで翻弄するのと同じだった。クリスタルから流れ込む、おぞましくも蠱惑的な記憶が、ミアの肉体に女の技を、快樂の貪り方を教え込んでいた。

卵さえ産みつけられなければ、記憶の封印が解かれることもなかったのに……。瞼の裏に、過去のクリスタルセイバーたちの記憶が蘇る。悲哀に満ちているのに、どうしようもなく淫靡な、牝の記憶――。

ぶしやつ、ぶしやあああつ。秘部からエッチなエキスが噴き出す。

「触手は美味いか?」「ハハッ、ずいぶん奉仕が手慣れているな」

「んっ、れろ、うるふあひ……じゅぶぶううっ!!」

口答えるヒロインに罰が下される。妖魔の手が乳首をつねり、触手が喉奥にまで侵入してきた。ミアは目を限界まで見開き、ガクガクと痙攣する。

(あふっ、あふううっ! こ、このままじゃ、わたしの身体墮ちちゃうっ、卵産んじやううっ。ほんとにイヤらしい奴隷に……苗床にされちゃうよおっ!!)

触手たちがビクビクと激しく震え始めた。射精しそうになっているのだ。見ただけで、極太の触手たちは三十体を超えていた。背後にもいるのだ。五十体は余裕かもしれない。妖魔の精液は他の生物とは違う。ミア自身が一番わかっていて。そんなものを大量に浴びたら、性に狂ってしまうに違いなかった。

「んぶぶっ! らめっ、射精さないでえっつ!! やだやだあっ、ぶ、ぶっかけたらゆるしやないんだからっつ! はふっ。やめなさいよおっ!!」

いまの状態でさえ、ミアが絶頂を堪えていられるほどの精神力を維持しているのは奇跡であった。たとえクリスタルセイバーだとしても、この瘴気の中、卵のエキスを膈内に出され、子宮と口、身体のあらゆる場所を陵辱されて、抵抗の意志を持つことは難しいのだ。変身少女はよく堪えていたが、さすがの強靱な精神も、ひび割れ、崩壊寸前だった。そこへ、触手たちは無情の一撃を振り下ろした。

「いいぞ。トドメだ、たっぷりと射精してやれッ」雑魚妖魔が煽った。

「あつ!? だ、だめつたら……つ!! はぶつ、ひいんつつ! は、恥ずかしいトコずぼずぼしないれつ、アアツ! ビクビクらめなのつ、ゆ、許してつ、それだけは……お、お願ひ……い、いやあああつ!!」

ミアの願いも虚しく、ありつたけの精液がミアの全身にぶっかけられた。

ドブツ、ドツピユルウウツツツ! ビチャツ、ベチャベチャアアツ!! 粘液にまみれ、穢らわしい妖魔に締めつけられながらも、その美しさを失わなかったヒロインのコスチュームが、白濁の嵐の中に沈んだ。ブロンドツインテールも、ツリ目の可愛らしい顔も、悲鳴を上げる口内までもが穢される。膣を犯す触手から、特に濃厚な一撃が放たれる。子宮口がわずかに開いて、精液が内部に広がっていく。

ガクガクガクツ! 触手によって宙に持ち上げられたヒロインは、腰を前後左右に激しく痙攣させた。陸に揚げられた魚のようにピチピチとヒップが跳ねた。スペルマに込められた濃厚な淫のエナジー。楽勝のはずの雑魚妖魔たちに敗北し、触手に膣内射精されてしまふ、正義のヒロインにあるまじき敗北姿。たまらぬマゾヒスティックな魔悦に加え、墮鬼が生み出した肉獄に漂うとてつもない淫気によって蒸れ焦らされた身体が、ついに牝の高みに押し上げられた。

——ダメ……!! 我慢できないつつ!!

「イ——イクツ! イックウウウウツツ!!」

痙攣から一転、硬直したミアは、溜まりに溜まった欲望を解き放った。ぶっしやあああ

あつと、お漏らしのように牝汁が飛び出し、飛沫となつて散つた。一生懸命堪えていた表情は淫らなアクメ顔に堕ち、あられもない嬌声を上げてイキ狂つていた。

「はへええええつ！ いいよおつ！ オマンコいいのつ、ポテ腹せつくしゆしゆごひつ！ あひひいいいゝゝツ!!」

ビクツ、ビクビクツツ！ 女体から力が抜ける。口元からとろりと涎が垂れた。

膣を愛液が満たした。女の悦汁を子宮がじゆるじゆると吸い込んでいく。魔の力が高まる。触手の汁。クリスタルエナジー。あらゆる力を取り込み、ついにそのときは訪れた。

胸元のクリスタルが眩い閃光を放つた。衝撃で妖魔や触手たちが吹き飛ばされる。拘束から解放されたミアが、「あへえええつ」と無様な声を上げて柔らかな肉床に尻餅をついた。身体は自由になつたが、お腹を押さえ、乱れた呼吸でヨがり狂つている。

「あひひいいいっ！ 産まへるっ！ いやああつ、わ、わたしの身体から……アアツ！ 出てきちゃうっつ、卵、たまごおつっ!!」

純白コスチュームに包まれたお腹は大きく膨らんでいる。ミアは、恥も外聞もなく股を広げた。そうしなければ、あまりの苦痛と快楽で心が壊れてしまふそうだった。

「んひいいいっ！ はへ、ああああ……。へあ、ああんっつ!!」

レオタードを引つ張る。膣口が開いていた。ミアは顔を真っ赤にして気張っている。ぬぶつ、にゅぷぶぶつと、膣の中から淫猥な音が聞こえた。

（う、産んじやダメ……！ ここで産んだら……!!）

それは恐ろしい直感だった。この中で卵を産んでしまったら、なにもかもが終わってしまふ気がする。取り返しをつかないことが起こりそうな予感がするのだ。

しかし、ミアは子宮口から出てくる卵を止めることができない。絶頂の痙攣は、ミアの身体から力を完全に奪い去っていた。膣が痺れ、いくら気張っても締まらないのだ。

「はひっ、はひっ……きゅはああああんっつ」

膣が伸びた。卵が出てくる。新たな生命が誕生する瞬間だった。だが、これは神聖でもなんでもない、淫欲にまみれた妖魔の出産劇だ。ミアは卵が出てくるこの瞬間も、快楽に溺れ苦しんでいた。

「で、出ちゃううっ！ あっ、あああっつ!! 卵産んじやうううっ」

ドプッ！ ビンヤアアアッ！ 卵は一気に膣を通り抜けた。勢いよく飛び出したそれが肉床に受け止められ、ミアのお腹がポコッと凹んだ。

「た、卵産んでイッちゃうっ！ イヤっ、いやよおおおっつ!!」

ミアは何度も首を振って、絶頂を止めようとしていた。だが、両手で秘部を押さえると、最後にはアヘアへとアクメ顔を晒しながら絶頂してしまう。ガクッ、ガクガクガクッ！ 総身が戦慄き、秘部を弄くりながら何度も腰が前後に振られた。開ききった牝穴から、一気に絶頂汁とスperlマが噴き出す。

「あ、が……んほおおっつ！ はへ、はへええっ。イグウツ、アアッ、た、卵産むの気持ちよしゆぎ……卵アクメ、い、いいのほおっ!!」



隠そうとしてもとても隠しきれないボテ腹だ。ミアはなんとか身体だけは起こしたものの、立ち上がることは叶わず床にぺたんと座り込んだ。じゅく、じゅくと染み出す肉汁が、聖なるスーツに染み込んでいく。

これほどまでに快感に溺れ、恥ずかしすぎる台詞を叫びながら絶頂しても、ミアの心が悦楽という名の悪に染まることはなかった。小悪魔的な余裕こそなくなったものの、聖少女は未だ痴態を見せてしまうことを恥じらい、隠そうと無駄な抵抗を見せている。

清純な少女が恥じらう様は、牡のサディズムを刺激する。妖魔たちは飽きることなくペニスをいきり勃たせ、淫らにうねる女体を愉しむのだった。

しかし、彼らを束ねる最強の妖魔、堕鬼の許しが無い限り、妖魔たちがミアの肢体に触れることはなかった。そして、その堕鬼すらもミアに触れようとはしない。彼らは自らのイチモツをミアに見せつけるように扱き、ねつとりとした牡の視線を注いでいた。

正面、左右背後。あちこちから浴びせられる欲望にまみれた視線に肌がじりじりと灼ける。弱体化してしまった恥辱のスーツは、ただ身に纏っているだけで少女の身体を悦楽に悶えさせる。

(ス、スーツ……わたしのスク水コスチューム……おまんこに食い込んできちゃう……)

堕鬼と目が合った。心の中まですべて見透かされているような気がして、胸の奥がキュンと締めつけられる。なにか言わなければ、このままでは喘ぎ声が漏れてしまいそうだ。ミアは口を開いた。

「だ、堕鬼……。こ、ここはなんなの!？」

「知りたいか」

堕鬼の股間も、妖魔たちと同じくいきり勃っている。ミアはその肉棒を見、慌てて視線を逸らした。あのペニスに膣内を抉られイキ果てた記憶を、脳よりもまず身体が、秘部が覚えている。スク水ヒロインは無意識の内に身を振っていた。

「ここは産卵のための場所だ。貴様は、我らの尖兵を永遠に産み落とすのだ」

「な……。っ。そ、そんなことさせない……。絶対に、抜け出してやるんだから……」

「相変わらず威勢だけはいい。前のクリスタルセイバーもそうだった。だが最後には、クリスタルも失い、そのなんの役にも立たない姿になると、喘ぎ、悶え、悦びながら『俺』を産んだのだ」

「う、うそよっ。あの人はそんな……。卵を産んで悦ぶなんて、あるはずないっ」

「果たしてそうかな。貴様もその姿になり、気づいているはずだ。その身体は快楽に抗えない、変態の性奴隷に堕ちているのだと」

堕鬼の声が耳の中で響く。ミアはたちまち「あ、あぁっ……」と、甲高く可愛らしい声で啼き、自分の胸を抱きしめるようにして震えた。

濃い牡のニオイが、密閉された狭い空間に充満する。蒸し暑く、汗が滲み出す。

「ち、違うもん……。このスーツは……。スク水スーツはあ……」

（コ、コスチュームのことは言うなあ……。わたしの変身が……。ううっ、こ、こんなスー

ツになっちゃうなんて……)

恥ずかしくてたまらない。ミアは堕鬼の言う「その身体」を見下ろした。

フェティッシュなコスチュームはすでにムンムンに蒸れ、じつとりと湿っていた。紺色に汗染みが広がっていく様はなんとも艶めかしい。ドレススーツのインナーレオタードは股間に食い込んでいたが、スク水スーツはミアのヒップをいたずらに強調していた。

(ス、スーツが……レオタードよりキツいい……。なのに、き、気持ちいいなんてえつ)

ビクビクッ、ビクンッ。ミアは、まだなにもされていないにもかかわらず、コスチュームの締めつけだけで感じてしまう。プニプニした頬を汗が流れた。

伸縮性抜群のレオタードに比べ、弱化したスク水スーツは限界があつた。そのフェティッシュなコスチュームをキツキツにしているのは、大きく膨らんだポテ腹だ。クリスタルエナジー、女の性感エナジー、堕鬼の精液——あらゆる力を取り込んで大きく成長した卵が孵化を待っている。妊婦よりも大きな腹はずっしりと重く、さらに陣痛ではなく、快感と排泄衝動を与えてくる。卵の『排泄』が、性的昂奮、絶頂に直結することは確実だった。

ポテ腹に比例するように、変身ヒロインは一層薫り高い牝の芳香を放つ。勃起した乳首がスーツに浮き出していた。巨大な乳首は、指で握って扱けるほどだ。スーツの締めつけに、トロトロと漏れる母乳が淫猥だった。乳腺にはミルクがこれでもかと溜まり、産まれてくる妖魔へすぐにエナジーを与えられるようになっていたのだ。

いまのミアの姿を見て、正義の変身ヒロインだと思ふ者は誰もいないだろう。自分でも

情けなさすぎるスーツ姿だと思う。そして、そんなコスチュームを身につけながら、
「へ、変態じゃないもんっ……。これは、あんたたち妖魔をやっつける聖なるコスチュームなんだから……」

正義のために闘う変身ヒロインであるとな乗ってしてしまうことに、聖少女は被虐的な快感を覚えるのだった。

——クリスタルセイバーミア！ 妖魔を討伐するため、ここに参上っ！！

敗北を知らなかった頃の名乗りが、頭の中で何度も繰り返された。スク水スーツへの弱体化変身をさせられたこの瞬間、その台詞を叫んだらどんなに惨めで、無様だろう。想像するだけで、膣口に蓋をするようにへばりついている堕鬼の精液がトロトロと溶け、秘華が再び花開くのを感じる。股間にびっちり張りついたスーツは、淫唇の間に食い込みこそしなかったが、開ききった牝膣が、きめ細かなスク水生地にべっちりキスをした。

「んっ、んん〜……！！ はあ、はあ……あ、あうううん……」

きめ細やかな特殊繊維に、淫欲への耐性が弱まり、さらに感じやすくなった秘裂が吸盤のように吸いつく。むずがゆくも、得も言われぬ快感だった。堕鬼の前、声を漏らすものかと唇を閉じるも、可憐な変身少女の声は艶めかしい吐息となって出てきてしまう。

（オ、オマンコ開いちちゃってる……。イヤあ……た、卵出ちやいそう……！）
「う、く……あはあ……」

ヒップがここまで重いなんて思ったこともなかった。立ち上がろうとするミアは顔を上

げていることができず、墮鬼の逞しい足を見ながら屈辱に震えた。ミドルブーツを履いた脚にグッと力を込め、ブルブルと震えながら身体を上げていく。膨らんだお腹が邪魔でひどく不格好だった。だが、ゆっくりと立ち上がりかけたところで、ふるふると波打つように揺れる太ももにまったく力が入らないことに気づく。お尻を持ち上げることができないのだ。筋肉までもが、色気をムンムンに放つ媚肉に変じてしまったようだった。

「あううつつ」

ボテ腹ヒロインはバランスを崩し、前方に転んだ。産みつけられているのは妖魔の卵なのに、咄嗟に片手でお腹を庇ってしまう自分が情けない。ミアの鼻先に墮鬼の足があった。まるで、妖魔の足下に跪き、奉仕しているかのような。地面についた手にはめているのが弱化した短いグラブであることに、変身少女は唇を震わせた。全てが屈辱だった。

疼く身体が切なすぎて仕方がない。心は快楽に屈したくないのに、牝の悦楽を覚え込まされた淫らな肉体が、高潔な精神をもってしても抑えきれないほどに暴走する。暴走は性感を増幅させ、牝のエナジーとなって、子宮にて排泄欲を加速させる卵たちに、聖少女にトドメを刺す力を与えた。

ドクンッ、ドクンドクンッ。

「ああアッ!! お、お腹が……卵……だめええ」

お腹を抱える。それだけでは足りない。ミアは慌てて、股間に手を当てた。

(ス、スーツがはち切れそう……。きついよお……!)

「いよいよだな。クク、いいぞ。貴様が堪える表情は素晴らしい……。産卵にふさわしい舞台を用意してやろう」

堕鬼が嗤う。ぶりゆぶりゆと、肉部屋が動き出した。

ミアが座り込んでいる床に変化が生じた。隆起し、少女の身体を持ち上げる。居並ぶギヤラリーによく見えるように。

「きゃあつ！ や、やめ……くふおおお……」

床が変動する刺激ですら、いまの敏感なヒロインにとっては致命的な快感だ。漏れてはいけない声が漏れ出してしまふ。少女は身体を仰け反らせ、びくんびくんと痙攣した。

(で、出てきてる……子宮から、卵が……先っぽ、出てるう……)

変化は、聖少女を見世物として晒すだけに留まらない。ベッドのように広がり、ミアが横たわれる十分な大きさとなる。その形は、少女の恥辱を煽り、最も屈辱的な妖卵排泄をさせるためだと一目でわかるものだった。

それは分婉台であった。脚を投げ出す側は二股に分かれ、開いた股がよく見えるようになってる。腕も拘束するつもりだ。磔はりつけのように左右に伸びていた。

「こ、こんな……いやあ……ああつ、ゆ、許して、こんなところで卵産まされるなんて……いやつ、いやあああッッ」

分婉台の下部から、スク水ヒロインを拘束するための触手が伸びてくる。グラブとブーツに巻きつき、抱え上げる。ミアは両手と両脚を縮こめ抗った。一度でも身体を開かされ

てしまえば、全身を無防備に視姦されてしまうだけでなく、排泄衝動を我慢できなくなるという確信があった。

(だめえ……このスーツじゃ、抵抗できないよお……)

分娩台という名の晒し台で、淫靡なる肉縄に抵抗する変身ヒロイン。しかし、スク水スーツはミアに、触手を振り払うだけの力すら与えてはくれない。ググ、グググ……。ミアの身体が開かれていく。

「あぁっ！」

ビーンツと、両手両脚が引き延ばされた。一度伸ばされてしまえば、縮こめることは困難を極める。ミアはもう、ヒップを揺らすばかりで、いくら力を込めても、自らの媚体を隠すことはできなくなってしまうた。

晒し台に身体が固定される。太ももは限界まで開かされ、股間を見せつけるM字開脚を強要されている。両手も磔にされた。股間ばかりか、恥辱に歪む美少女の表情がよく見えるように分娩台が傾いた。

「あうんっ、はへぁ……へぁ、あはぁあぁ……」

晒し者にされた直後から、ミアの呼吸は明らかに色を変えた。

抵抗しようと力んだせいで、卵を閉じ込めていた子宮口は逆に卵を押し出し、最初の卵が半分ほど膣内に出てきそうになっている。

「おおうっ、おほおおおっっ」

童顔のヒロインからは想像できないような、牝豚にふさわしい声が漏れる。股間に広がる染みは粘度を増すばかり。だから、だからと、ローションかなにかのように糸を引き台から流れ、床に溜まっていく。

牡の視線が、ギラギラ、ギラギラと、待ちに待った瞬間の訪れを予期して昂奮した。

陰茎を擦る手の動きが加速する。カウパーが絶え間なく溢れ、ペニスを抜く妖魔たちの手はもうぬるぬるとテカっていた。

「エロい声で啼きやがるぜ。恥ずかしくないのか？ クリスタルセイバーなんだろう？」

「ああ。そんな……うう、言わないでえ……。はあはあ、ま、負けないんだから……そうよ、わたし、クリスタルセイバー……」

「濡らしているくせに」「マゾの変態だな」

「ああ、あああつつ……いやあんつつ、う、うるさい……」

叩きつけられる言葉が、どうしようもなくマゾ性感を刺激する。漏れる。漏れてしまう。ミアは唇を引き結んだ。

（わ、わたし、こいつらのオカズにされちゃってる……。ああ、見ないで……。変身ヒロインをズリネタにするなんて、許さないんだから……）

脚を閉じられれば――。せめてそれだけは。しかしどれだけ望んでも、淫靡なる肉の塊と化した太ももは波打つばかり。徹底的に吸い尽くされたエナジーは、スーツを維持するだけで精一杯で、とても触手を焼き払うことなどできない。それどころか、雑魚妖魔ども

にオカズにされ、昂奮してしまふ始末だった。

ぐぎゆるるつ、ずぶぶつ、ぎゅうう……。膣の奥から音が聞こえた。

「はあんつ、ん、んほおおお………」

(でてきへるつ。オマンコ広がるううッ)

苦しい。だが、膣から脳への抜けるような悦楽。ずるりと、キツイ子宮口から抜け出した卵が、ぬめぬめと女蜜という名の潤滑油で満ちた膣内を押し広げる。

牡たちのペニスを抜く勢いは、いよいよ激しさを増す。くちゅ、つぶちゅぶと、ズル剥けた包皮がカリ首に当たると、鈴穴から溢れ出たカウパーによってヌルヌルになった亀頭との間に生々しい音が生ずる。ミアは生唾を飲み込んだ。

「あはああ……。ぜ、ぜつたいに、卵出したりしないんだから………」

強がるものの、潤いすぎたヒロインの膣は、締めつけられれば締めつけるほど卵を膣口に向かって押し出してしまう。最早、少女の卵を堰き止めているのは、パツパツのスク水スーツのみであった。豊満な身体に似合わぬ、それ故にフェティッシュで淫猥な色香を放つコスチュームによって、膣に蓋がされ、卵を漏らすという痴態を晒すことを防いでいる。

だが、それはミアにとつていいことなのか悪いことなのかはわからない。

「んおおおお……はへ、あへえええ………」

膣内に留まる卵は、当然のように熟れに熟れ、発情に発情を重ねた鋭敏な膣で震え出す。殻にあいた、目に見えない細かな空気穴から染み出してくるのは絶頂エキス。いままさに、

少女は快感の頂点に迫らんばかりであった。

まともに仰け反ることも許されない分娩体勢に加え、身を締めつける密着コスチュームである。サイズの合わないピチピチスーツに思考をかき乱され、さらに自身が「変身」しているということもあって、マゾヒスティックな鋭悦は留まるところを知らない。

白目を剥きかけ、アヘアへと喘ぐその姿。卵を産むことを堪えるのは、正義のヒロインとしては正しいかもしれない。だが同時に、快楽に乱れる姿を、感じ入った牝の表情を敵に見られてしまうなど、変身ヒロインにあるまじき恥辱であった。

「いいぞ……。最高の顔だぜ」「マンコが膨らんでるな。早く出しちまえよ」

サディズムの炎に油を注がれた牡どもが、口々に昂奮を叫びながら包囲の輪を縮める。赤黒く勃起した淫棒はいまにも射精しそうなほどにひくついていた。

「あああんつつ！ たま、ご……たまご……たまご……」

白目を剥きガクガクと身を震わせる。卵が膣襷を抉り、痺れさせながら、膣口に触れた。「あひいつ、ひぐ、も、漏れる……だめ、だめえッ」

もこつと、股間に張りついたスク水スーツが盛り上がった。「おおつ」と、妖魔たちの間から歓声とも吐息ともつかないどよめきが走る。

エナジーを吸い、でっぷりと肥えた妖魔の卵であった。ついに、ミアの膣は我慢しきれずに、卵を排泄しにかかっているのだ。

がくんがくん、びくびくつ。ミアの総身が何度も跳ねた。食いしばった歯の間から、「く

ひいひい、んぐう、んみゅううツ」と喘ぎが漏れ、ダラダラと涎が流れ出た。

快感——。ただそれだけだった。ペニスを挿れられたときは違う。卵のそれは、我慢に我慢を重ねた尿を排泄する解放感と、卵を産んでしまうという敗北感、虐悦が、絶頂間際の快感に上乘せされたものであった。

（漏らさないんだから……！ ああつ、こんな、卵なんて、クリスタルセイバーのわたしが、産んでいいわけ……。ううつ、お願い、わたしを守って……）

薄い布地、特別な聖なるスーツに懇願する変身ヒロイン。まだ耐えられる。絶頂を堪えようとする高潔な意志の糸はまだ切れてはいない。

だが——。

ぐぎゆるるう、じゅぶぶつ、ぐぐう。

「あ、あ……！　だ、だめ、それはだめ……！　だめなんだから、お願い、待つ……」

子宮口は、最初の卵を排出したことですでに緩みきっていた。そして、産みつけられた卵は一つではないのだ。

どぼぼつ、ぬつぶううつ。二個、三個目の卵が、一気に子宮から飛び出してくる。ガツンガツンと、飛び出す勢いそのままに腔口でつかえている卵にぶち当たった。

「んひいひい。い、いくつ、イクううつ!!　ああああ——　ツツ」

一瞬のことだった。被虐のヒロインの全身が、瘡おこりのように激しい痙攣を起こす。あらゆる悲鳴を上げ、淫肉の分娩台につけていた背を、尻と肩甲骨を支えにして思いきり持

ち上げた。

エビ反りになったクリスタルセイバーが絶頂する。むりむりと卵がひり出され、股間の膨らみはさらに大きさを増した。牝液がどぼどぼと溢れ出し、お漏らしのようにスク水から飛び出す。卵という栓のせいで、汁は放射線状に広がった。

「潮噴きやがった!」「見ろよあのアへ顔。こっちも射精ちまいそうだ」「だらしねえな。おい、布がずれ始めてるぜ」「ハハ、いいのか、卵が飛び出しちまうぞ」

「はひ、はひい……。え、あ……? ああつ、そんな、ス、スーツが……」

妖魔たちの嘲笑に股間を見れば、股間を覆い、卵のお漏らしを止めていたスク水の股布が、ゆつくりと横にずれ始めていた。絶頂しうねる膣がもたらす膣圧、そして二個三個と子宮からひり出てくる卵。その表面がヌルヌルとした愛液にまみれ滑りやすい上に、丸みを帯びた形をしているとあれば、スーツがずれ始めるのは当然の結果であった。

「らめええ……ああ、もろつて、おまんこにもろつてえ……」

気をやったばかりの聖少女は、呂律の回らぬ口で淫猥な語を漏らし、持ち上げたヒップをふるふると振った。持ち上がったヒップは、分婉台との間に、自ら漏らした大量の愛液によって粘ついた糸を引く。ゴムボールのような爆尻から太ももへかけてのラインは、聖なるヒロインの童顔からは想像つかないほどふくよかである。それがぶるぶると震えながら、ずれかけのスーツを戻そうと上下左右に乱れる様に、牡の射精感が高まっていく。

「漏れるのらめ、らめ……んほおお……。あ、ああ……ッ」

「フハハハ。無様だな。敗北を認め、すべてを出してしまえばいいものを」

墮鬼が嗤った。ペニスを扱いてはいないが、先端からはカウパーが漏れている。「ううう」と、それを見たミアは喘いだ。

「ま、負けないんだから……わたし、くふおおお！ あひいいんつつ」

ヴイイイイ、チュパパパッ！ 半分ほど膣口から顔を出した卵がバイブレーションする。肉壁が複雑に絡まった秘唇に快美な激悦が走った。

「あへえええつ！ らめらめらめええツ！ そんないつぱいこられたら……が、がまん、がまんできにやひいつ」

ビクンビクンツツ!! 少女の小柄な肢体が激しく跳ね上がった。クラブの手指が硬直し、ブーツのつま先が反り返る。絶頂した直後に再び襲い来る魔悦に、ミアは快樂の頂に昇りつめようとしていた。

もう、スク水スーツを気にしている余裕はない。聖少女は、自分を見失わないように歯を食いしばり、涎を垂らしながら悩乱するので精一杯だった。

振動する卵は、どンドン膣口から抜け出してくる。それもまた快感だ。股布がずれる。ぶつくりと膨れあがった無毛の恥丘が、膣の膨らみが露わになる。そして見えてくる、白濁色の卵――。

「あひいいいっ！ でちやう、おまんこ卵産んじやううっ!! 卵お漏らしいツ」

「たまらねえ。射精るツ」「俺もだ」「一斉にぶっかけてやる」

妖魔たちが口々に叫び、悶えるヒロインに発射口を向けた。

「きゃあああつ。い、いまぶっかけらめえつ。イク、ああ、く、くるッ！ すごいのきちやうつつ！ わたし、ま、負け……!!」

ドブウツ!! びゆるるるるるうつつ!! ペニスが爆発した。堕鬼を除いたすべての妖魔から濃厚なスペルマが放たれ、聖少女の身体をあますことなく白濁に染める。

トドメだった。もう我慢できない。イク。股布がずれる。漏れてしまう。堕ちる。転げ堕ちる——絶頂の、産卵淫獄へ。

「んほおおおおつつ！ お精子いっばひ……アアッ！ イク、イクイクイグウウツ!!」

全身が硬直する。絶頂。このエクスタシーは意味が違う。産まれてしまう。ミアの力をたっぷりと吸った、大量の妖魔たちが。なのに気持ちいい。敗北のオルガスムスだ。マゾヒスティックな悦楽に吞まれるままに、ミアは秘部を突き出した。

「た、卵ッ！ でちやううううううッ」

ぐじゅぽおつ!! 股布が完全にずれ、秘部が露わになった。

瞬間、半分ほど漏れかけていた卵が勢いよく噴き出す。

「あひいいいいつ！ ぜんぶ漏れひやうつ！ らめ、らめらめらめええええええつ」
膣が爆発したのではないかというほどの快感だった。

妖魔たちの射精は終わっても、聖少女の排泄劇は終わらない。我慢続けた尿が、一度漏れ出すと止まらぬように、ミアの膣から次々に卵が飛び出してくる。

じゅぽんっ、ぶぶっ、ぬぶぶっ。

「ああアッ、イグウッ！ 壊れひやうっ、おまんこ、がばがばになっひやうう」

二個、三個、四個……。淫らな襲の集合体から止めどなく吐き出される卵。その一つ一つがミアに絶頂を叩き込む。開きっぱなしの子宮口から、快感のあまり締めりがなくなつた腔。白濁にまみれたヒロインは、髪を振り乱して悩乱した。

妊婦以上に膨らんでいたお腹が凹んでいく。じゅぽん、じゅぽんっ。お腹の圧迫感がなくなるのと反比例して、快感はもう、気が狂わんばかりに上昇していた。

(ぜんぶ出ちゃうっ。卵孵化しちゃだめなのに……ああ、も、もう……)

小ぶりの卵は十個を軽く超え、二十個に迫ろうとしていた。ミアの愛液にとっぷりとまみれた殻に、ピキピキとヒビが入り始めている。

「んほおおおおっ、あひいっ、イグううっ、いやああああっ」

変身少女の絶頂声に反応するかのよう、殻が割れ、小さな腕が覗いた。射精を終えた妖魔たちや、墮鬼が見つめる中、卵は次々に孵化していく。

細い指だ。指の間には退化した水かき。手の大きさから想像されるよりもずっと長い腕。肌の表でぬらぬらぬめる粘液に、ギョロりと剥いた瞳。蛙を思わせる妖魔であった。

「ゲゲゲ……ゲゲッ」

喉を鳴らし、ギョロギョロと目を動かす。その視線が変身少女に向いた。

ミアは手脚をピンと伸ばしたまま、ようやく絶頂から下りてきたところだった。ヒイヒ



いと喘ぎ、秘部をぐっぽりと開いたまま悶えている。媚肉が乗った腰は、しかし卵を産みつけられる前の、くびれがあるそれに戻っていた。すべての卵を排泄し終えたのだ。

「はひ、ううう。こ、こんなものが、わたしの膣内から……！ あっ……あきやああっ」

生まれたての蛙妖魔どもは、まだミアの膝の辺りまでの大きさしかなかったが、見た目の跳躍力を発揮し、晒し台に乗った変身少女の身体にへばりついた。

ミアの身体から染み出る汗、股間周りの愛液、唾液……それらすべてが、妖魔にとつての馳走でありエナジーだ。彼らは長い舌を伸ばし、ミアの肢体を隅々まで舐める。

「な、舐めちゃらめえっ。い、いますごく敏感なの……ああっ！」

少女の汚れを舐め取る妖魔たちは、瞬く間に成長していく。

そして、溢れ出るのは濃厚な魔の気配。墮鬼に比べると弱い、人妖よりも遥かに強い。スーツ越しに舐められる感覚が堪らなく淫靡で、少女の性感を焦らす。イけそうでイけないもどかしさに狂いそうになる。

ダメ、快楽に飲まれちゃダメ……。わかってる。だがもう、心をいくら強くもつたところで、性の悦びが暴走するのを抑えることができないのだ。我慢しよう、そう思っても、妖魔の陵辱は留まるところを知らず、さらに苛烈に変身ヒロインを追い詰めてくる。

「やめへ……汚いの……わたしの汚いの舐めちゃ……んほおおおっ!!」

ズボオッ!! 突然、だらしなく開いたままの膣に、墮鬼のものではない産卵触手がぶち込まれた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

二次元 **ドリームマガジン**
ED DREAM MAGAZINE

今号の特典
牝奴隷オークション

02 2014年10月号
今年も宜しくお願いします!

参ります♡

不思議の世界へ

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

コミック **UNREAL**
アダルト

偶数月
17日発売

二次元 **ドリームマガジン** ED DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

02 2014年10月号
今年も宜しくお願いします!

参ります♡

不思議の世界へ

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

コミック **UNREAL**
アダルト

奇数月
12日発売

KTCといえば闘うヒロインアンソ!

時丸佳久

メガミ クラシス
MEGAMI CRISIS Vol.15

奇数月
下旬発売

ロインが
に墮ちまくるアンソロジ!

コミック **UNREAL** アダルト

メガミ クラシス MEGAMI CRISIS

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!! ※いずれも18歳未満の方は購入できません。